



新 宮 正 春

隠 密
シャイン

KOFUSHA NOVELS

隠密ジャイアンツ

著 者 新宮正春

発行者 深見兵吉

発行所 光風社出版株式会社

東京都文京区関口一―三二―四 郵便番号一―二
電話番号〇三―二〇四―二四四一 振替東京八―一二九―三

印刷所 サンワード企画

製本所 越後堂製本

落丁、乱丁はおとりかえします。

定価はカバーに明記してあります。

© 1985 MASAHARU SHINGU Printed in Japan

ISBN4-87519-563-X

新
宮
正
春



隠
密
ジ
ャ
イ
ア
ン
シ

これまで男と男の熱い闘いを描いてきた新宮正春は、本書において野球と武道の融合という形でそれを見事に昇華させた。奇想天外なプロットと真剣勝負の気魄が^な絢い交ぜになり、フェアなスピリットが横溢し、著者の面目躍如たる伝奇ロマンに仕上がっている。新たな剣豪小説に着手するきっかけになるだろう。



長編野球伝奇ロマン

隠密ジャイアンツ

百正春

KOFUSHA NOVELS

朔	死	照	謀	逆	対	変	秘	魔	開	目
風	闘	射	略	手	決	幻	劍	球	幕	次
209	181	157	137	115	92	68	35	12	9	

装幀

柳沢達朗

隠密ジャイアンツ

開幕

1

王貞治が、一塁側のロッカールームを出たのは、試合終了から一時間もたってからだった。

髪が濡れていた。

監督一年目の昭和五十九年は、きちんと濃紺のスーツを着てきたが、二年目のこの日は、わざとネクタイを締めず、純白のタートルネックのセーターをスーツの下に着て球場入りした。

ただ、下着だけはすべて新品だった。

この日、午前六時に起きてから、王はまっ先に窓

から首を突きだして、空模様を見た。

前日は、雨で試合が流れている。

先発の西本聖は、オープン戦の終盤に右膝裏の筋を痛め、それが王には気がかりだった。

かといって、江川卓にはすでに第二戦の先発を申し渡している。代えることはできなかった。

王の杞憂は、的中した。

先発の西本は、四回、九十八球で大洋打線にKOされた。

濡れた髪を手で撫でつけて、王は通路に待ち構えていた約四十人の担当記者たちにいった。

「……寒かったからね。ゆっくり風呂につかってきたよ」

この日の試合が始まった午後一時の気温は十二度だった。例年より六度は低い、花冷えの土曜日である。

だが、寒いのは低い気温のせいではなかった。王にはそれがわかっていて。

開幕第一戦を、6―12という大差で敗れたのは、球団創立以来はじめてのことだった。

過去、巨人はこの開幕第一戦に10失点が高最多であり、この日は、その記録を上まわってしまったのだ。テレビカメラが回っている。

そのライトが王にはまぶしかった。

「百三十試合戦わなきゃいけないんだから、早くこの負けを忘れることですよ」

と、王は突きだされたマイクに向かって、低い声でいった。

ほかにいうことはなかった。

2

6―12という大差で負けた四月十三日の大洋との開幕第一戦では、原辰徳が七回に同点の3ラン・ホームを打った。

相模原の自宅はデーゲームのとき遠すぎるので、

九段下のホテルに泊っている原は、この試合に母と妹をネット裏に招待していた。

オープン戦で八本のホームランを打ち、スター大賞をものにしたりして、バッティングの調子を上げていたが、開幕戦ではまだ一本もホームランを記録したことはなかった。

巨人の四番打者がアーチをかけたのも、たしか五十五年に王が打って以来だった。

（さすがに、足どりがちがうな……）

目の前をカジュアルなジャンパーを着た原が歩いている。

その軽い足どりを見て、王は思った。

（……でも、三回にもっと前進守備をとらせておけば……）

たぶん、試合はこうまで一方的なものにはならなかっただろう。

2―2のタイ・スコアに追い上げられた三回表、一死満塁から山下大輔の打球は、サードの原のやや

右へところがった。

かなり強い当たりだった。

これを原は、ひと呼吸待って捕球し、併殺を狙って二塁へ送球した。

ランナーとは一歩の差だった。

だが――。

その一歩の差は大きく、アウトカウントがひとつ増えただけで、三塁ランナーの高木豊が勝ち越しのホームを踏むのを止めることはできなかった。

もしも、バックホームに備えて、せめて中間守備をさせていたら、大洋の攻撃は、次の四回から八番の若菜嘉晴からはじまることになる、先発の西本ももうすこし持ちこたえていたかもしれない。

ベンチが指示する前に原が動くべきだ、というコーチもいたが、それはとにかく、あの一球で西本はシュートで思いきって内角をつく気を失ったのはたしかだった。

負けるときは、すべてが悪いほうへ、悪いほうへ

と転がる。

記録に残らないちよつとした判断のミスが、積み積もって投手の足を引っぱることになる。

西本がレオンに左翼スタンド中段に強烈な3ラン・ホームマーを打たれたのは、それから十数分後の四回二死一、三塁からだった。

肩口から、すーっと入ってゆくカーブを、あの場面でなぜ西本が投げたのか。

とくに原の守備だけではなく、たとえば一回の立ち上がりには、中畑清が加藤博一の打球を胸に当ててヒットにした。

西本の調子も悪かったが、そうしたバックの守りの悪さが、西本から集中力をじりじりと奪っていったといえる。

（レオンのデータを、もう一度洗い直さなきゃ……）
球場の外には、大勢のファンがたむろしていて、「王さん、あしたこそ勝ってよ」

「頼みますよ」

と、口々に声をかけてきた。

王は、まっすぐ前を見据えて競輪場跡にある駐車
場へと急いだ。

アイボリーホワイトのベンツに乗りこみ、ドアを
締める。

王の下唇には、あまり強く噛みしめていたため、
白っぽい跡が残っていた。

魔球

1

「えっ？ そんなうまい手があるの？ もっとくわ
しく聞きたいね」

受話機を持ち換えながら、王はちらつと腕時計に
目を走らせた。

東京・目黒区中根の自宅だった。

応接間には、世界地図を銅板にエッチングしため
ずらしいテーブルがある。その上に、きのうスコア
ラーの高橋正勝が届けてきたスコアカードと、打球
方向のチャートなどが散らばっている。

「……ちようどいま、手許に開幕戦のデータがあるんだ。ちよっと待ってよ」

王はテーブルの上のカードのなかから、無数の点線と実線とが交錯したチャート抜きだした。

開幕の対大洋二連戦とその後、甲子園へ転戦した対阪神三連戦での打球方向を克明に記録したチャートだ。点線はゴロを、実線はフライをあらわしている。ヒットは赤で記入されている。

巨人にはスコアラーが六人いるが、高橋は索敵のための先乗りスコアラーではなく、影のように毎試合、チームとともに移動し、ネット裏からナマの情報を収集する最古参のスコアラーだった。

相手投手の攻め口はもちろん、味方の打者のヒッティング・ポイントも彼のデータを見れば一目瞭然だった。球団ではこの高橋の調べたデータを契約更改のさいの資料にしていた。

「たしかに健さんのいうとおりだなあ」

受話機を片耳に押し当てたまま、王は呻いた。

「……十三本か。こっちのチャートで見ても、たしかに打球はきわどいところをすり抜けてるね。合ってるみたいだよ。健さんの調べたデータと……」

健さん、というのは、秋の強化合宿を宮崎でやったさい、臨時トレーニング・コーチをつとめた甲田健二のことだった。

現在、武蔵野工芸大で体育学を教えている甲田は、王にとっては早実野球部の三年後輩にあたるせいもあって、気やすく口をきける相手だ。

大学の研究室にいるころから、研究論文の材料を集めるため、甲田はよく後樂園や多摩川のグラウンドに顔を見せた。そのたびに巨人の選手たちのトレーニングの相談にも乗っており、どの選手がどういった運動特性をもっているか、よく知っている。

その甲田が王に指摘したのは、三塁・原の守備範囲のことだった。後樂園の二連戦をネット裏からじつくりと眺めて、自分なりにデータをとったのだという。

電磁オシログラフを利用して、バット・スイングの強さを記録する装置を考えだしたり、投手がボールを指先から離すときのリリース・ポイントの力を数値で表わせるよう特殊な圧力板内蔵のボールを作ったり、甲田はなかなかのアイディアマンだった。体育学の専門家である甲田が集めたデータなら、百パーセント信用してもよかった。

「……なるほどねえ。それで、健さんはこの赤線をただの点線に変える方法があるというんだね？」

王は、本題にはいった。

「ええ。去年にくらべると。原クンの守備範囲はだいぶ広くなってますけど、まだまだベース寄りの打球には強いとはいえませんかね。ぼくが思いついたアイディアを採用してくれると、そうなるでしょうね。王さん」

甲田がいった。

そのチャートにはつきりあらわれているように、四月十三日の開幕から五試合で、原の守備位置近く

に十五本の打球が飛び、そのうち二本がヒットになったのは、事実だった。

いずれも、甲田の計測によれば、ごくきわどい当たりばかりで、すくなくとも一本は精一杯、手を伸ばした原の十センチから十五センチ先をすり抜けていったというのだった。

「でもね、王さん、きょうぼくが電話したのは、単にデータを分析してどうこういうんじゃないってことはわかってくれますね？」

「……………」

「ぼくの案は、もっと具体的なんですよ。原クンのフィールディングを見ちがえるようによくする方法なんですから……………」

「ほんとに、そんな手があるの？」

王は、もう一度、受話機をもった手を持ち換えて、次の言葉を慎重に選びだした。

「……健さんのことだから、なにかいい考えがあると思うけど……………」

甲田は、王がそう反応するのを見通していたかのように語調を変えた。

「王さんが疑うのもわかりますが、まあ欺されたと思って試してみてください」

それ以上、自分のアイディアについてはふれずに、

甲田はつづけた。

「あした、グラウンドへ行つて、直接お話ししますよ」

どうやら第三者には見られたくない理由があるようだった。王は敏感にそれを感じとって、

「じゃ健さん、あしたの十一時ごろ球場に来てくれる？」

と、いった。

「十一時ですか？」

「ああ、駒田の特訓につきあうんでね。ちょっと早いけど、頼むよ」

王は、甲田の返事をたしかめてから電話を切った。もし甲田のいうとおり、原がたちまち守備面で水

ぎわだったプレーができるようになるのなら、それを試さない手はない。

王は、改めてじっくりとテーブルの上のスコアカードを点検した。

2

甲田は、後樂園のスペシャル・ルームで王を待っていた。

「変に気を持たせて、すみません。ああは思ったものの、実際にぼくが考えたようにうまく行くかどうか、ちよっぴり不安になってきましたね」

「健さんらしくもないじゃないの」

王は甲田の肩に軽くジャブをくれた。

「……ただ、マスコミの人たちには気づかれていないだろうね？」

現役時代の王は、スポーツ紙の担当記者たちに対し、すべてを開けっぴろげにしてきたが、監督にな